

後期アユッタヤー朝のアジア間貿易 —オランダ東インド会社文書からの接近—

研究代表者: 島田竜登(西南学院大学経済学部准教授)

I 研究の目的

「商人国家アユタヤ王朝」とはいささか奇妙なネーミングではあるが、意外と後期アユッタヤー朝の特質の一側面を上手くあらわしているのかもしれない。ウィットフォーゲル流の水利を契機とした東洋的専制国家がアユッタヤー朝の本質ではなく、王自らが大商人であった商人国家であったというのである(原洋之介(1986)12-28)。本研究は、こうした大きな命題を直接、検証する立場にはないが、研究動機の大背景と位置付け、17、18 世紀におけるアユッタヤー朝の国際貿易、なにかんづくそのアジア間貿易の実態を、オランダ東インド会社が作成した諸文書を利用して、解明することを試みるものである。

17 世紀以降のアユッタヤー朝の国際貿易に関する先行研究として先ず言及すべきは、石井米雄氏による一連の研究である(石井米雄 (1999))。アユッタヤー朝史研究は、当時の現地語史料が大幅に欠けるため、同時代のヨーロッパ人旅行者たちによる欧文紀行文や後世に作成された王朝年代記を利用した研究が通常であるが、石井氏は、こうした欧文の紀行文などのほかに、当時の日本の長崎に来航した唐船が日本当局に提出した『唐船風説書』や、1767 年のアユッタヤー朝崩壊後の 19 世紀に作成された『三印法典』を利用して研究を進め、アユッタヤー朝の財務・貿易当局の機構を明らかにしたり、アユッタヤー朝が日本からペルシアに至る広範なアジア諸国と貿易を行っており、対外貿易が王朝の主たる経済基盤になっていたことを示してきた。

しかしながら、アユッタヤー朝史研究の今後の発展のためには、これまでの先行諸研究は基本的に静的な研究にとどまっていると言わざるを得ない。時系列的な歴史の動態分析を行う必要が要請されるのである。とりわけ、17 世紀末以降には、とりたてて重要な紀行文はアユッタヤー朝に関する限り存在せず、他の史料群からのアプローチが必要になるであろう。本研究は、石井氏をはじめとした優れた先行諸研究を前提とし、オランダ東インド会社文書を用いて、研究をさらに進化させることを意図する萌芽的研究のひとつである。

ところで、オランダ東インド会社は 1602 年に設立され、18 世紀末まで継続し、アジアとヨーロッパとの間の貿易やアジア域内の貿易活動に従事した、いわば史上初の大規模グローバル・カンパニーである。もちろん、オランダ東インド会社は、シャム(タイ)とも継続的に商業関係をもった。とくに、17 世紀の初期から 150 年以上にわたり、若干の例外期を除き、アユッタヤーなどに商館を構えていたことは重要である。商館では、一定の組織だった規則のもとに、日々、綿密な文書が作成されていた。これらの文書のうち、オランダ東インド会社のアジア域内での最

大拠点であったバタヴィア(ジャカルタ)を経由して、オランダ本国に転送された文書は、現在までも多数、残されており、これをして、後期アユッタヤー朝の動的な歴史分析を可能ならしめるのである。

II 研究プロジェクト実施状況の概要

研究の方法としては、Archief van de Verenigde Oostindische Compagnie, 1602-1795 (VOC)(オランダ東インド会社文書)をベースに、さらに、このコレクションの関連文書である Archief van de Boekhouder-Generaal te Batavia, 1700-1801 (BGB)(バタヴィア経理局長文書)(いずれもオランダ国立公文書館(Archief Nationaal, (NA))所蔵)を補足的に利用し、問題の解明にあたることとした。

ところで、アユッタヤー関係のオランダ語史料は、複製マイクロ資料も含め、重要なものはほとんど日本国内では所蔵されていないため、マイクロフィルムを購入にも意を払った。また、アユッタヤー朝の貿易についての全体構造を把握するため、従来の研究が重視してきたアユッタヤーやリゴール(ナコーンシータンマラート)以外の港市にも着目し、今回の研究では、ジャング・セイロン(プーケット)における現地調査も実施した。

III 後期アユッタヤー朝のアジア間貿易—オランダ東インド会社を中心に—

シャムと呼ばれた時代のタイのアユッタヤーは、17世紀にはアジア内の中継貿易の一大拠点となっていた。バタヴィアがオランダ東インド会社の植民都市であったのに対して、アユッタヤーは現地人政権の首都であった点が対極的である。チャオプラヤー川をタイ湾の河口から約 100 キロメートル上流に位置したアユッタヤーにはアユッタヤー王国の都が置かれていた。各地のアジア商人が来到するばかりではなく、ヨーロッパ系の様々な商人もアユッタヤーを訪れた。この国の経済的基盤は対外交易にあり、輸出入から生じる商業的な利益、さらには内地から国王へ貢納品としてもたらされる輸出向け生産物の輸出利益に依存していた。

港市アユッタヤーは国際性豊かである。17世紀初頭における在住日本人を基盤とした日本町の存在やそのリーダーとしての山田長政については著名であるが、アユッタヤーには日本町のほかにも多数の外国人居住区が設定されていた。城壁で囲まれた内部には、王宮や国教である仏教関連の寺院がある一方、同じ中之島内でも城壁の外側とチャオプラヤー川に挟まれた河口側の地帯には中国人居住区があった。

また、中之島の外ではチャオプラヤー川に沿う形で、オランダ人、イギリス人、日本人、ポルトガル人、コーチシナ人、モン人、マレー人、マカッサル人といった外国人居住区が設定されていたし、ポルトガル教会やフランス教会も存在した。アユッタヤーでの国際貿易に参加する

人々は、このほかにも、インドやペルシア系の人々もいた。もともと、彼らの貿易は、アユッタヤーでなされることもあったが、より重要なのは、マレー半島のクラ地峡帯のインド洋側の港テナッセリムであった。テナッセリムからアユッタヤーへは陸路で通じており、マラッカ海峡を経由しない交易ルートが存在したのである。ただし、こうしたインドないしはペルシア系の人々がアユッタヤーに居住する場合の待遇は他と比べて良く、アユッタヤーの中之島内部に居を構えることができた。

一般に、17世紀のアユッタヤーは対外交易の全盛期とされ、18世紀は対外交易が縮小し、そのまま1767年の王朝の崩壊を迎えたとされる。もちろん現実の動向はきわめて複雑だが、大筋としては、この一般的な見取り図は正しい。

基本的にはアユッタヤーの交易はアジア間貿易であり、米などを輸出し、香辛料などを入手する東南アジア域内交易のほか、インド、日本、中国との交易に区分することができよう。東南アジア域内貿易は常時継続的に行われたが、その他は時期的な盛衰がある。17世紀には、インドならびに日本との交易の比重が高かった。当時のタイの輸出産品は、鹿皮や鮫皮など日本市場向けの商品であったから、これらを日本に輸出し、かわって日本から銀や銅を入手し、インド方面へアユッタヤーを舞台に転売するのである。とくに、日本との交易に関しては、アユッタヤーの国王などの王室や高官たちが投資しており、利益率が高い交易ルートであったことが伺える。また、たとえば、日本から入手した銅は、インド各地に拠点を置くヨーロッパ系の自由貿易商人らの手により南・西アジアへ運ばれ、対価としてインドの綿織物がアユッタヤーに運ばれた。こうした広範囲に及ぶ一連の貿易構造はオランダ東インド会社のアジアでの三角貿易の構造ときわめて酷似しており、その意味でアユッタヤーの交易活動はオランダ東インド会社のライバルであったのである。

しかし、18世紀に入ると日本とアユッタヤー間のジャンク船による交易活動は衰退した。これは日本が銅の輸出を制限し、たとえ輸出が可能であっても中国本土での日本銅需要がより高く、唐船によって日本から輸出された銅が中国本土に吸収され、アユッタヤーにまで回らなくなったこと、さらには日本の市場構造の変化により、タイ製品への需要が減退したことによる。結局、この日本貿易の衰退は、南・西アジアとの交易をも縮小させることとなった。にもかかわらず、アユッタヤーの対外交易が全面的に衰退したとはいえない。かわって存在感を示し始めたのが、中国との交易である。なるほど当時のアユッタヤー王国は清朝と朝貢関係を持ち、広州での交易を実施することは可能であったが、むしろ重要なのは中国からのジャンク船の来往であった。広州のほか、厦門や寧波からもジャンク船がアユッタヤーを目指した。この中国人商人の目的とするタイ製品は第一には米であった。18世紀は中国の人口増大期であり、タイの米生産は発展のための販路を見出したのである。また、このジャンク船がバタヴィアの場合と同様、中国人移民の供給ルートとなっていたことも注目に値する。米の輸出にせよ、中国人移民の増加にせよ、いずれも近代タイ経済を象徴する要素の起源は18世紀にさかのぼるのである。

いずれにせよ、近世のアユッタヤーの対外貿易は、オランダ東インド会社が完全な主導権

を握っていたバタヴィアの事例とはきわめて対照的である。アユッタヤーではオランダは一介の商人集団にすぎなかった。ただし、オランダはアユッタヤー貿易から退出することは考えなかった。日本向け商品の仕入れ地としてアユッタヤーの価値があったのであるが、もしアユッタヤー貿易を放棄する場合、日本向け商品を中国人商人が取扱い始め、ジャンク船で日本に運ぶという恐れがあったからである。この防止のため、オランダはアユッタヤー王国との友好に努めていたのであった。

さて、オランダ東インド会社は、1608年にアユッタヤーに商館を設立し、その後、錫積み出し港としても重要であったリゴールにもアユッタヤー商館の管轄下に副商館を設置するなど、積極的な貿易活動に従事した。当初はアユッタヤーからの米穀輸出がみられたが、次第に日本貿易のための拠点としての地位を占めるようになった。オランダ東インド会社は、鮫皮、鹿皮などを日本市場向けの重要商品を手に入れるために、アユッタヤー商館を維持したのであった。なお、プーケットは錫の積み出し地であったが、その貿易管理はマラッカ商館のもとにあった。

表1 アユッタヤー商館におけるインド製綿織物の販売粗利益、1700～1752年

単位:フルデン (年平均値)			
	粗利益 [A]	販売数 [B]	[A/B]
1700/01-1701/02	9,153	7,410	1.24
1725/26-1726/27	7,247	4,376	1.66
1750/51-1751/52	3,008	1,543	1.95

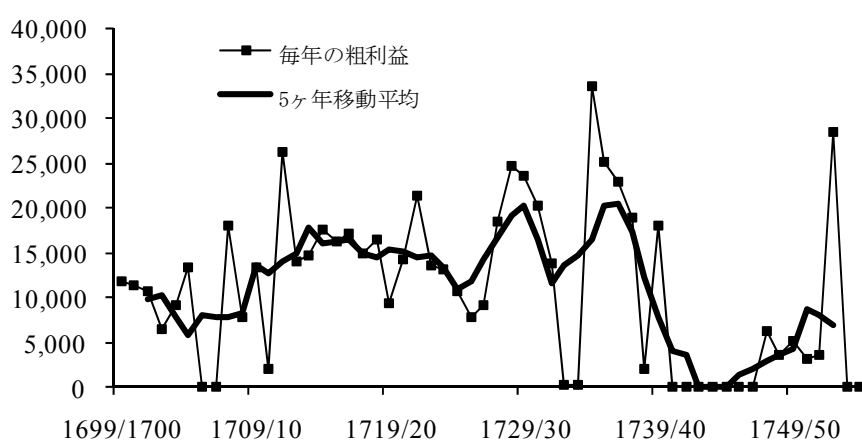
[註] アジア内の軽フルデンは、重フルデンに換算して表記してある。

[出典] NA: BGB 10751, 10752, 10764, 10765, 10775, 10776.

オランダ東インド会社にとって重要なことは、アジア間貿易からできるだけ多くの利益をえて、ヨーロッパからの貴金属の持ち出しを少なくし、胡椒・香辛料や、のちには綿織物といったヨーロッパ市場向けの商品をアジア内で入手する必要がある。日本から銀ならびに金、銅を手に入れ、それを元手に南アジアでの綿織物を購入し、さらに南アジア産の綿織物をアユッタヤーなどで転売することで日本向け商品をととのえた。こうした地理的にも大規模なオランダ東インド会社のアジア間貿易の一翼を担ったのがシャム貿易であった。

表1と図1は、18世紀におけるオランダのアユッタヤー商館の輸入貿易の状況を示すものである(図1の太線は5ヶ年移動平均値を示す)。なお、フルデン(gulden)はオランダの通貨単位で、フローレン(florijn)、ギルダー(英: guilder)などとも呼ばれる。また、オランダ東インド会社はアジアにおいて1742/43年度までは軽フルデン、1767/68年度までは重フルデンという単位を使い、本国の通貨単位とは異なっていた。Ryuto Shimada (2006) 180)。これらを見比べると、オラ

ンダ東インド会社がえたアユッタヤーでの輸入貿易からの利益は、大部分がインド製綿織物の販売からの利益であったことが理解できよう。こうした輸入貿易の状況は、基本的に 17 世紀と同様であると考えられる。一方、アユッタヤーからオランダの手によって輸出された商品は、17 世紀とは異なり、日本向けの蘇木(主として絹織物用の染料)が、その中心となっていた(Ryuto Shimada (2009) 65-67)。ちなみに、通常、18 世紀にはオランダのアユッタヤー貿易は衰退していったと考えられているが、輸入貿易の粗利益から判断する限り、1730 年代半ばまでは、むしろ上昇傾向にあったことがうかがえる。



[註] 細線は毎年の粗利益で、太線が5ヶ年移動平均値。なお、単位はフルデンで、アジア内の軽フルデンは、重フルデンに換算して表記してある。

[出典] NA: VOC 4864.

図1 オランダ東インド会社アユッタヤー商館の粗利益、1699～1755 年

1741 年にはいったんアユッタヤーとリゴールの商館を閉鎖したため、オランダ東インド会社の貿易は数年の間ほとんど途絶えるが、1747 年には商館が再び設置され、ビルマ軍の攻撃でアユッタヤー朝が崩壊する 1767 年までオランダ東インド会社のアユッタヤーやリゴールでの貿易は継続した。

ところで、オランダ東インド会社のアユッタヤー商館は、そのライバルとなるオランダ東インド会社以外の貿易船による様々なアユッタヤー貿易についての記録を残している。ここでは、その一端を紹介してみよう。一般に、ナーラーイ王の時代(1656～1688 年)には多くの船舶がアユッタヤーに来航したが、次のペートルチャー王の治世下(1688～1703 年)以後、そうした華々しい対外貿易重視の政策はもはや時代遅れのものとなってしまったかのごとくに語られることもある。しかし、実際には、完全に国を閉ざしたわけではないことに注目すべきである。

表2は、その一例として示すものである。具体的には、1701 年から 1702 年にかけて、アユッ

タヤール港における非オランダ船の出入港記録であり、アユッタヤーからの目的地ないしはアユッタヤーへ向かう出港地別に分類したものである。この2年間に、アユッタヤーを出港した非オランダ船は30隻であり、入港は24隻である。この数は、ナーラーイ王の時代と比べ少ないことは確かである。現に、例えば、ナーラーイ王治下の1681年10月から翌年9月にかけての1年間には、76隻の出港船と少なく見積もっても53隻の入港船があったのである(Remco Raben (2007) 211)。また、一般的な特徴として、インド方面との貿易が大幅に衰退しているという側面もある。また、たしかに、表2に示されているように、スーラトやベンガルとアユッタヤーとを結ぶ貿易船が極めて少数ではあるが存在しており、こうした貿易はインドのムスリム商人によって行われていた。なお、テナッセリムを経由したマレー半島の陸路貿易は記録に掲載されていない。一方、中国との取引は比較的順調で、中国の広州、厦門、寧波からジャンク船がアユッタヤーに來航した(表3)。こうした中国船によるアユッタヤー貿易が18世紀を通じて相対的重要性を帯びてくるようになるのであった。

表2 アユッタヤー港の非オランダ船出入港数、1701～1702年

	出港	入港
スーラト	0	1
ベンガル	1	0
マラッカ	4	3
バタヴィア	9	6
マニラ	1	2
トンキン	0	1
中国	13	9
日本	2	2

[出典] NA: VOC 8268, 8684.

表3 アユッタヤー入港ジャンク船数、1701～1702年

広州船	厦門船	寧波船
3	5	1

[出典] NA: VOC 8268, 8684.

いずれにせよ、当該期のアユッタヤー朝は、アユッタヤーのほか、リゴール、テナッセリム、ジャンク・セイロンなどを対外貿易の拠点としていたが、18世紀初めまでの錫輸出をのぞき、その輸出商品はアジア市場向けが中心であり、また、輸入商品もアジア製品が主であった。いいか

えれば、後期アユッタヤー朝の貿易は、アジア間貿易の連鎖構造のなかにこそ存在しえたのである。

表4 オランダ東インド会社の商館ごとの粗利益と贈物費用、1701/02年度

単位：フルデン

商館名	粗利益	贈物費用	(%)
バタヴィア	930,629	0	0.0
セイロン	302,175	16,276	5.4
コロマンデル	305,902	49,154	16.1
マラバル	107,348	3,097	2.9
ベンガル	326,547	8,858	2.7
スーラト	555,406	79,273	14.3
ペルシア	560,345	11,025	2.0
パダン	36,063	11	0.0
日本	558,753	77,489	13.9
シャム	13,414	10,077	75.1
マラッカ	16,692	95	0.6
パレンバン	13,469	9	0.1
バンテン	9,937	1,884	19.0
アンボン	53,048	0	0.0
バンダ	39,547	0	0.0
テルナーテ	32,895	1,274	3.9
チモール	1,474	335	22.7
マカッサル	21,620	2,890	13.4
ジャバラ	14,715	0	0.0
チレボン	790	0	0.0
ケープタウン	28,239	0	0.0

[註] 価額はアジア軽フルデン表示。

[出典] NA: BGB 10752.

国際貿易の興隆には、アユッタヤー朝と諸外国との間において、密接な外交関係の構築と維持を必要とした。一般に、前近代社会における国際関係においては、国家間での贈物のやり取りは極めて重要な位置を占めていた。贈物の交換は、政治的な安全保障の相互依存の構築と継続を象徴するとともに、経済的にも双方にとって利をともなう一種の貿易であったことに

注意しなければならない。さらに、アユッタヤー王朝史研究において、優雅な贈物の交換行為は、他国の場合と比べ、特別の注意がむけられてもいる。歴史叙述においては格段の人気のあるテーマのひとつと言えよう。事実、Dhiravat na Pombejra や Bhawan Ruangsilp といった現代のタイ人の歴史家は、当時のシャム宮廷における贈物交換の政治的ないしは文化的重要性を強調している (Dhiravat na Pombejra (2001); Bhawan Ruangsilp (2007))。

しかしながら、アユッタヤー朝の贈物交換は、当時のアジア諸国と比較して、きわめて経費のかかる行為であり、例外的であったことは知られていない。すくなくとも、オランダ東インド会社にとって、シャム王室との贈物交換は過重な負担であった。オランダ側からのタイ宮廷に対する贈物としては、香辛料、毛織物、絹織物、絨毯、ペルシア馬、大鏡、宝石などがあった。一方、それに対するシャム側からの返礼品はオランダ側にとって不満のつる品々であった。たとえば、1672 年、ナーラーイ王はオランダ東インド会社に象を送ろうとしているが、オランダ側はこれに不満であった。オランダ東インド会社としては、生きている動物などは欲せず、むしろ錫とか象牙といったような容易に転売可能な品を望んでいたのである。

さらに、贈物の経費自体が、シャム商館の利益に比べ、膨大なものでもあったことは注意を要する。表4は、1701/02 年度におけるオランダ東インド会社各商館での販売粗利益(諸費用を控除する前の金額)と贈物費用額を集計したものである。ここでは、アジア軽フルデンで表示してあるが、シャム商館での粗利益は 13,414 フルデンと少額であるにもかかわらず、贈物費用は 10,077 フルデンと極めて高額であり、その比率は 75 パーセント余りに達する。一方、他商館に目を転じると、贈物費用の比率は極めて小さく、シャム商館の贈物費用はオランダ東インド会社にとって大きな負担であったことが分かる。

もちろん、これはある一年間だけの集計値であるが、1699/1700 年度から 1754/55 年度においての、総粗利益は 608,967 フルデン、総贈物費用は 321,829 フルデン(いずれもアジア重フルデン表示)であり、贈物費用の比率は 52.8 パーセントになる (NA: VOC 4864)。いずれにせよ、アジア内においてアユッタヤーでの取引には多額の贈物費用がかかり、それに対して、販売利益は小さかったのは疑いない。華やかにみえるアユッタヤーの国際貿易も、実態としては利益を圧縮する貿易であり、ここに後期アユッタヤー朝の国際貿易の一大特徴を見出すことができるのである。

IV おわりに

本研究助成の支給により、挑戦的テーマの研究が実施可能となった。本報告者は、まずは、できる限りの文献の入手に努めた。とくに先行研究であまり取り扱われることの少なかった 18 世紀におけるシャム貿易に関するオランダ東インド会社文書は基本的にすべてマイクロフィルムを作成・購入し、おかげで日常的に史料解読・分析を行えることが可能となった。膨大な史料群ではある。しかし、アユッタヤーを中心にアジア間貿易ならびに世界貿易の構造を明らか

にし、もって、タイ史ばかりではなく、日本を含むアジア史、さらには世界史的な視点から後期アユッタヤー朝の貿易史を明らかにする作業を今後とも継続し、最終的には単著としてとりまとめることを計画している。

末筆ではあるが、本研究課題の遂行を実現させていただいた JFE21 世紀財団に記して感謝申し上げます。

V 参考文献および研究成果の出版・口頭報告

参考文献(本報告における引用文献)

Dhiravat na Pombejra (2001) *Siamese Court Life in the Seventeenth Century as Depicted in European Sources* (Bangkok: Faculty of Arts, Chulalongkorn University).

Remco Raben (2007) “Ayutthaya, King Phetracha and the World: Dynamics of Kingship and Trade in Late Seventeenth-century Ayutthaya”, in: Dhiravat na Pombejra *et al.* (eds.) *Proceedings of the International Symposium ‘Crossroads of Thai and Dutch History’* (Bangkok: Seameo-Spafa).

Bhawan Ruangsilp (2007) *Dutch East India Company Merchants at the Court of Ayutthaya: Dutch Perceptions of the Thai Kingdom, c. 1604–1765* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers).

Ryuto Shimada (2006) *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston, Brill Academic Publishers).

Ryuto Shimada (2009) “Siamese Trade in Agricultural Products with Japan and China in the Eighteenth Century”, in: A.J.H. Latham and Heita Kawakatsu (eds.) *Intra-Asian Trade and Industrialization: Essays in Memory of Yasukichi Yasuba* (London: Routledge).

石井米雄 (1999) 『タイ近世史研究序説』(岩波書店)。

原洋之介 (1986) 『『商人国家アユタヤ王朝』仮説について—東南アジアからの知的貿易—』(原洋之介編著『東南アジアからの知的冒険—シンボル・経済・歴史—』(リプロポート)所収)。

研究成果の出版・口頭報告

本研究課題に直接ないしは間接的に関係する範囲内で、本報告者が出版ないしは作成した研究成果(研究論文4件)、および学会・研究会・国際研究集会等での口頭報告(9件)は以下の通りである。

研究論文:

- 1) Ryuto Shimada, “Siamese Trade in Agricultural Products with Japan and China in the Eighteenth Century”, in: A.J.H. Latham and Heita Kawakatsu (eds.) *Intra-Asian Trade and Industrialization: Essays in Memory of Yasukichi Yasuba* (London: Routledge, 2009).

- 2) 島田竜登「18 世紀におけるオランダ東インド会社の錫貿易に関する数量的考察」『西南学院大学経済学論集』第 44 巻第 2・3 合併号、2010 年。
- 3) Ryuto Shimada, “Siamese Products in the Japanese Market during the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, in: Yoko Nagazumi (ed.) *Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia; Essays in Honor of Leonard Blussé*, Toyo Bunko Research Library 13 (Tokyo: The Toyo Bunko, 2010).
- 4) 島田竜登「近世アジアの交易世界—オランダ東インド会社文書からの接近—」『歴史と地理』634、2010 年。

口頭報告：

- 1) 島田竜登「東インド会社と近代世界システム—オランダ東インド会社の事例から—」、九州歴史科学研究会例会、西南学院大学、2009 年 4 月 25 日。
- 2) 島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易」、国際商業史研究会、東京大学、2009 年 7 月 12 日。
- 3) Ryuto Shimada, “South-East Asian Tin Production and its Export Trade in the Eighteenth Century”, XVth World Economic History Congress, Utrecht University, The Netherlands, 3 August 2009.
- 4) Ryuto Shimada, “Invisible Links: Maritime Trade between Japan and India in the Early Modern Period”, XVth World Economic History Congress, Utrecht University, The Netherlands, 4 August 2009.
- 5) 島田竜登「パネル・ディスカッション『19 世紀のアジア・ネットワーク—金融網と通商網をとおして—』へのコメント」、第 78 回社会経済史学会全国大会、東洋大学、2009 年 9 月 27 日。
- 6) Ryuto Shimada, “Porcelain Token and Chinese Society in Siam during the Nineteenth Century”, International Workshop: Monies for Ordinary People: neither Precious nor National, The University of Tokyo, Japan, 15 October 2009.
- 7) Ryuto Shimada, “Economic Links with Ayutthaya: A Multilateral Trading Model between Japan, China and Siam in the Early Modern Period”, The Second International Conference: Canton and Nagasaki Compared, The University of Tokyo, Japan, 1 December 2009.
- 8) Ryuto Shimada, “The International Trading System of the Late Ayutthaya Kingdom: An Economic Analysis of Exchange of Gifts in the Dutch Trade”, International Workshop: Institutions and Dynamics of the Pre-Modern Global Trade: Asia and North America in the 18th to 19th Centuries, Kyoto University, Japan, 10 March 2010.
- 9) Ryuto Shimada, “The Economics of Gift Exchange at Ayutthaya: Reconsidering the Siam Trade by the Dutch East India Company in the Early Modern Period”, International Workshop: Local History, From the Outside: Using Foreign Sources in Asian History, The University of Tokyo, Japan, 11 December 2010.